

ま え が き

学校長 小 松 周 吉

本校は、今年開校30周年を迎え、去る11月5日大学内外から多数の来賓を迎えて盛大な記念式典が催された。高校教育研究会も、本校とともに30周年を迎えたわけで、ここに発刊の運びとなった「高校教育研究」第29号は、いわばその記念特集号ということができる。

ここに収録された諸論文は、これを大別すると、(1)教科に関する専門研究、(2)教育課程及び指導法に関する研究、(3)教科外教育活動に関する研究に区分することができる。

まず高瀬副校長の「老子註釈書について」は、近世（江戸期）の老子註釈書のうち、刊本を中心に年表を作成して老子の読まれ方を調査し、その近世期における変化の大略と各学派の消長を大瞥したものである。

米谷教諭の「数Ⅰのベクトル教材の指導法についての試み」は、教育課程改訂に資するため、3名の教育実習生を指導しつつ行なった実証的研究である。

能崎教諭の「東ドイツの数学教科書紹介——海外教育事情視察報告その2」は、本紀要第28号に発表された「東ドイツ上級中学校の数学科指導計画」に続いて、今回は第11学年用数学教科書の第1章から第3章までを紹介したものである。

亀田教諭の「30年間における本校生徒の体格の変遷と疾病の傾向」は、本校生徒の体格及び疾病の状況を石川県及び全国の傾向と比較検討し、今後の対策を考察したものである。

岩城谷教諭の「過去5年間における本校のチーム活動の経緯と問題点」は、必修クラブ活動として実施している本校独自の「チーム活動」の問題点を考察し、生徒の希望にそったその解決の方向を探究したものである。

松田教諭の「現代国語の周辺——教科書教材以外の国語教材の拡大と応用」は、「現代国語」の教材の持つ矛盾（例えば教材の長さや授業時数・評価）を克服すべく、実践例を示しながらその解決の方向を探り、併せて本校独自の「特別合同授業」の国語授業への位置づけを試みたものである。

木村教諭の「技術史からみた世界史」は、文部省科学研究費（奨励研究B）による研究で、技術史の観点から世界史教材の再構成を試みたものである。

さて今日の高校教師は、教科外教育活動の指導や担当授業のほかに、進路・進学指導にかなりの時間とエネルギーを費さなければならない。その上本校では春秋二回学部の実習が行なわれる。上記の諸論文は、こうした多忙な教師の勤務の中での研究成果である。各方面からの卒直なご批判ご意見をいただければ幸いである。